
もしも人の夢を体験出来るとしたら……

日向

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも人の夢を体験出来るとしたら……

【Zコード】

Z23070

【作者名】

日向

【あらすじ】

「あなたの夢、覗かせてもらえませんか？」

人生負け組み海道まつしぐらだと思っていた俺に、唐突に掛けられた美少女からの言葉。どうやら世界は俺の知らないところで、人の夢を体験出来る技術を手に入れたらしい。

なんか俺の命を狙つてくるやつらや、天然爆発の美少女やら色々な奴らが関わってきて、もうわけがわからん！！

このすべての一挙一動は、どうやら俺の見る「夢」が原因なよう

で……、ついに彼女」と西沢夢美にもなにか秘密があるよ!で……。

小説を書くのは初めてで、読みにくい箇所がいくつあると思ってますが、楽しんでもらえたら管理人はサイコーに嬉しいです!!

プロローグ ～少女との出会い～（前書き）

最初の投稿ということで緊張が……。

Enterを押す人差し指が震えてるのは、武者震いと思いたい。

プロローグ ～少女との出会い～

「あなたの夢、覗かせてもらひませんか？」

四月七日、俺がこの高校で迎える一回目の入学式。

去年の今日と比べると、驚くほど関係のなくなつた行事終了後、唐突に向けられた言葉に若干の驚きと困惑の反応を見せる俺こと浦隼人。

中学一年から高校一年までの間で、女子と会話をした時間をしてつなぎ合わせても、カツチラーメンが丁度いいくらいに出来上がる時間しか経たないくらい短いだろうなと考えていつも溜息をしている俺に、まさか高校二年の新学期初日という特別な日に声をかけてくる女性が現れるなんて思いもしなかつた。

上の階から降りてきたといふことは、恐らくは先ほどの入学式で、行列をなして先輩方の間を歩いていった豪いらしの後輩の一人だろう。

腰までとびくかと書つほど長い黒髪を左右に揺らしながら彼女は俺が立つてゐる場所と同じ段差のところまで降りてきた

遠近法で気がつかなかつたが、身長は結構高い。俺自身、学年の中で背の高いグループに属しているが、彼女は俺と肩を並べるほどだ。百七十は確実にあるだらう。

「お答えを」

「……ん？」

「私の願いに対するあなたの答えを要求しているんですよっ。」

「……」

うん、声も悪くない。凛と透き通った声が、俺の五感すべてに漫透していくような感覚を覚える。

「サン、ニ、イチ……」

「え？ 何？」

「ゼロ。はー、ドーン」

視界が逆転した。

嫌な浮遊感が、体全身を包み込む。

その理由が、階段から落ちたせいで生まれたといつことにして気づくのに一・一秒、その犯人が、階段の中腹に立っている彼女だと気づくころには、俺は背中から廊下に落ちていた。

下校途中の人たちも行き交う中、どうやら俺は階段で後輩の女子にグーで殴られたようである。……え、なんで？

「レディを待たせるなんて、男失格ですよ、隼人先輩」

もう一度いいます、と、コチラに向かつて満面の笑みを浮かべながら、

「私の名前は雨沢夢美と言います。あなたの夢、覗かせてもらいましたか？」

「……」
「…………なぜ俺の名前を知ってるんだっ！」
「なんてセリフが吐けたら、将来は俳優か警察官、もしくは探偵なんかになれないかもしねえが、俺が考えていたことはただ一つ、…………背中が物凄く痛いということだけだった。

プロローグ ～少女との出会い～（後書き）

最初は乗りに乗って、早めの投稿になると思いますが、最低でも一週間に一度は投稿出来たらと思います。
応援のほづ、よろしくお願ひします。

1章 ～周囲の変化と俺の体調変化～ part1（前書き）

一回目の投稿とこりつことで、少し操作に慣れてきましたが、まだまだ怖い……。

しかし、あのアクセス数が分かる表示は便利ですねw

ランキングに乗るにはあと10000倍くらい必要ですが……。

改めて言うのもおかしいが、俺はいたって普通の高校生だ。人間偏差値なんてものが出来たら50ジャスト間違いなし、クラスの中でも、学校を休んだら10人くらいのクラスメイトには気づかれるが、残りは先生からの言葉があるまで気づかない……といった感じの。居ても居なくても世間的にはなんの支障も生まないであろう普通の人間。それが俺。

あえて、唯一人とちょっと違つとこりを挙げるとするならば、それは並外れた読書の時間だと思つ。自分で自分の趣味を、「並外れた」とか言つてる時点でちょっととかっこ悪い気がするのだが、そんなこと気にならないくらい俺の読書時間は半端ない。

簡潔に述べると、俺は一週間に十五冊の小説（ライトノベル）を読むという生活を、一年と二ヶ月間続けてきた。

一日三冊で、土日は本を買ったための稼ぎ（ハラギ）とこりとでバイトをしているので、一週間で十五冊。

きっかけは単純で、中学二年のときにあつた面接練習のとき、趣味を聞かれた場面で何も答えることが出来なかつたので、左隣の奴が言つていた『読書』というものをしてみようと思ったのが始まり。今ではもう読書は俺の生活の一部分となつてしまつている。

そのため、俺の部屋は本が一杯に詰まつた本棚だらけだ。部屋の中央に立ち、左回りで順に家具を見ていくと、本棚、本棚、TV、本棚、本棚、机、……女の子、ベッド、本棚、本棚、本棚といった感じになつていて。実に約半分もの空間が本棚によつて奪われてい

るのだ。

現在時刻は一時十一分。一時間ほど前に、初めて遭った女の子に左頬を殴られるといった、ラノベ的展開があったのだが、今はもうそんな痛みは引いていて、むしろなぜあんなことをされたのか自分になにか非があつたのではないかと、精神面でのほつのダメージが酷い。

まあ、田の前にその張本人がいるので、とりあえず聞いてみるとする。

「なぜお前がここにいる？」

「なんで回転イスじゃないのですか？ これじゃあクルクル出来ないじゃないですか。人生楽しい？」

「お前、何者なんだ？」

「(+)の部屋、私の家の近くにある墓場の匂いがします。きっと先輩の前世はテュラハンですね」

「どうやって部屋の中に入ってきた？」

「飴飴食べ食べか～さんか～、糖尿病で息しょ～ちゃん」

イスに座り、俺の勉強机の上に飴をたくさん並べてなにかやつている女の子を発見したのが四分前。その女の子が先ほど俺の頬を殴つちやつてくれた雨沢だということに気づいたのが三分五十秒前。警察か学校に電話しようかとも考えたが、犯罪的なオーラがまったくなかつたので、なぜここにいるのかまずは話しが聞こうと思つた

のが三 分 前。

以後なんの発展もなし。

雨沢の格好は、学校の時とは違ひ制服ではなかつた。まるで理科の先生を思わせるような、白衣で包まれている。よく見るとその白衣の下には、制服が見え隠れしていたので、ただ白衣を一枚上に纏つた様な格好だ。

もの凄く似合つてゐると思つた。

まるでこの服装が私服とでも言わんばかりの着こなし方。高校生が制服、会社員がスーツ、メイド喫茶にはメイド服といった感じで、雨沢には白衣以外想像が出来ない。……いや、ほんの一時間前に、制服姿の雨沢を見たのだが、なんていうか、そんなものはただの夢であつたかのような……ん？ 夢？

「そりいえ、あんた、夢がどいつとかさつとき語つてなか つおうあうああああああ！」

『どうとか』あたりでいきなり立ち上がり立った彼女が座つていたイスが、この部屋ご自慢のピカピカフローリングを滑つてきて俺の左足小指に激突。『なか』辺りからその後の記憶が薄れていてなにがあつたかよく覚えていないが、気がつくと俺の体は寝かされた状態になつていた。

ふー、急展開すぎてわけが分からぬ。とりあえず俺は一言。

「小指の感覚が.....ない.....！？」

～周囲の変化と俺の体調変化～ part2 (前書き)

小説の1パートをざわぐらいで終わらせればいいかよく分からず、何か変な始まり＆終わり方になってしまっています。
読みやすさを第一に考えていきたい！！

一つ不思議なことがある。

なぜか目が開かないのだ。……いや訂正。目を開いた感覚はあるのだが、それによって周りの風景が網膜に映りこんでくることはなく、ただ暗いだけ。

まさか気絶している間に夜になってしまったのかとも考えたが、この部屋は例え豪雨の真夜中だとしても、周りに明るい建物が多くあるため、カーテンを閉め切つてもここまで真っ暗闇になることがんて在り得ない。

となると驚かれるのは、俺の目になにか布的なものを被せて視界を奪っているということなのだが、不思議とそんな感覚は一切ない。

いつたい何が起こっているのか、とりあえず起き上がって今の状況を確認しようとしたのだが、どうやらその行為も許されないらしい。

首、胸、腰、両腕、両手首、両太もも、両足首に金具のようななにかが架かっていて、実質起き上がることも出来なければ手を動かして周りの状況を確認することも出来ない。

……さて、ここまで冷静に今の状況を確認してきたが、正直もの凄く怖いぞ。

なんだ、なんなんだ？ やべえよおい、改めて考えてみたらなん

プシュー

え？ 何今の空気が抜けたみたいな音？ まさか酸素抜かれてる
？ え、なんで？ 真空パック状態にわれちやう？ それでどこか
の国に運ぶの？ つてこうか人間運ぶときに真空にするのじゃなく
てそんなことしたら俺死んじゃうジヤン！ 酸素吸えないと生きれ
ないよ俺！ うあああああああああああああああああ！ こんなこと
ならもつと友達作つとくんだつた！ 死んだとき悲しむのが肉親だ
けつてなんか寂しいじやありませんか！

「何泣いているんですか先輩。キモチが悪いので、早くそこから出てくれませんか?」

「ほ、え？」「え？」「え？」

死ぬ前に自分の人生でどこが悪かったのかと大反省会を頭の中を行つていると、唐突に頭上からおつとりとした、色を付けるとしたら入学式に子供たちの背中を優しく見守ってくれている桜の花の桃色みたいな、そんなフワ～とした声が聞こえてきた。ただし発言内容と顔の表情は、般若のようだったが。

「先輩のくせに情けあつませんね（ペロペロ）、年下の私に気品にやるようでは世も末ですよ（ペロペロ）」

「そんなキャンパーを必死こいて舐めている奴に言われたくないが……」

よく見ると、俺の体に架かつていた金具はすべて取れており、体は自由に動かすことが出来た。まだ痛む小指に若干の恐怖を覚えながら、体をゆっくりと起こす。……そこで改めて、俺がどんな場所に閉じ込められていたのか、そしてここがどこなのかを確認する。

どうやら俺はカプセル式の装置の中に監禁されていたらしい。

よく見ると頭にはまだケーブルらしきものが機械に繋がっている。さつきの空氣が抜けたような音は、このカプセルが開いた音だったといつわけか。

場所は一応俺の部屋……だよな？なんか見慣れないパソコンやら複雑な機械やらが所狭しと置いてあり、映画に出てくるどつかの秘密スパイの隠れ家みたいな状況になつていてる。

それでもここが俺の部屋だと判断出来た理由は、天井に貼つてあったアニメキャラのポスターのお陰なのだが、あまりにも部屋の状況とポスターに写っている美少女の表情が合ってなく、なんだかいつもは可愛らしい表情なのに、今は不気味な笑顔を浮かべている女スペイにしか見えないといった有様だ。あとで剥がそう。

「先輩つて意外と寛大な心をお持ちなんですね。私の計算だと、この部屋の状況を見た先輩は、「え、マジかよ！ 何々、美少女の次はＳＥ？ 僕つてば凄い体験しちゃってんじゃねえの！」的な発言をしたあと、興奮して裸に靴下で私に襲い掛かつてくると思いましてが、半分しか合つていませんでした」

「お前の中の俺、最低男過ぎるだろ。あと半分つてなんだよ半分つて」

「先ほど『夢吸い取る君』から出てきたとき、発狂していたこと、あと私が美少女という部分です」

「……」

自意識過剰な上に、性格も中々の悪さだった。

恐らくコイツ、俺と同じで友達少ないんだろうな。そこだけは同情じてやるよ。

「今何か先輩、私に対してもう想だ。侮蔑の眼差しを送りませんでしたか?」

「その考えが在らぬ妄想だ。俺はいつだって無頓着な人間であると自分でも自覚しているよ」

変な所で鋭い女だなあ、おい。

「ナツですか、信用度ゼロパーセントの発言、ありがとうございます」

「……ほんとお前、いい性格してると

「ええ、よく言われます」

何を勘違いしたのか、俺の言葉に対し微笑んできやがったよこの女。まあ恐らく心の中には恐ろしい量の罵詈雑言が埋めているんだわつけど。

「ところで、それからお前が何をしようとしているのか、教えてよ

「何……とおっしゃこまかうと?」

「いや、IJの部屋の状況でなに誤魔化そうとしてんだよ。いつたいお前は人の部屋で何やひつじしてんだよって聞いてんだ」

「先ほどから先輩、『ナニ』や『やあいつ』や『お前、なかなかかい体してんな』なんて卑猥な言葉を、よく堂々と美少女の前で言えますね。尊敬しますよ」

手に持った飴をコチラに突きつけながら、自称美少女は上目遣いでコチラを睨んでくる。

いちいちカンに触る発言をする女だなコイツ。あと、誰がいつそんな変態発言をしたんだよ。

と、今気づいたのだが、コイツの身長学校で会った時より縮んでいる気がする。

少なくともこんな上下関係が生まれるほどの中の身長差はなかつたはずだ。へたすると五六十ないんじゃないか?

「ああ、それはそうですよ。私学校にいるときはアレを着けていますから」

「あれ?」

「ええ。あれですよ、あれ」

そう言つと雨沢は、玄関の方向に体を向け、そしてその先にある何かを指差した。

……足だ。足がある。

少し薄暗い中にひつそりと浮かぶそのシルエットは、まさしく人間の足。

しかも「一寧に学校で履く、一年生を示す緑色の上履きを履いているのがここからでも分かる。ちなみに一年生は黄色、三年生は青色だ。

「なんだ……あれ？」

「足ですね」

「馬鹿かお前は。なんだってのはアレの見た目の表現を聞いたんじやなくて、なんで足が俺ん家の玄関に佇んでいるんだって意味のなんだ」

「アレは私が発明したものです。コンプレックスを解消したいとい

「うひ女の願いを叶える魔法の一品、

『背伸びび〜る君!!』です、

「発明つて……」

お前の家系は日々「タイムマシン」を作ることだけを目標にして
いる一族か……と突っ込みたかったが、真顔で「ナリですよ?」
と言われるのが怖くてやめた。

ナリにえばなれつかも『夢吸い取る君!!』なんて単語を当たり前
のように使っていたし……、あながち俺のタイムマシン説も間違つ
てなさそだ……。

～周囲の変化と俺の体調変化～

part 3 (前書き)

今は本当に10円ですか？と疑いたくなるようなこの暑さ.....アバイ。

でも油断して、パンツ一枚で寝ると風邪は余裕で引くw

この執筆スピードがいつまで続くことやつ.....。

～周囲の変化と俺の体調変化～

part3

「じゅあれりそら私の田舎を、話せば貰こますね」

雨沢は急に真剣な顔をしたかと思つて、先ほど俺の小指を襲つたイスに座り、俺に座るよつに促してくる。と言つても、座る場所は床しかないので、なにか訝然としたしが。

「先輩は、夢ひトビのよつなものだと思こます?」

「は? 夢?」

また夢の話か。

「はー。夢ですか」

「夢ねえ。まあ不思議な現象と言えばやうだよな。構造はよく分からぬが、別に夢で困つたことなんて一度もないし、いいものだと思つや。俺もよくマクラの下に好きなアニメキャラの写真を入れて、夢に出てくれるよつに願つてたし。夢は妄想を体験させてくれる最終手段だと、俺は思つ」

「やうですか……やっぱつ変態なんですね、先輩」

年下にしんみりと変態宣誓を受けた高校生、その名は浦隼人。現在精神パラメーター急低下中で」」ぞいります。

「せっかくマジメに答えてやつたのに、その受け答えはないんじやないか！」

「いやそもそも私はそんな答えを期待していたわけでもないですし、根本的に質問内容を履き違えている先輩のまづに非があると思いますよ。なので逆に謝つてほしいくらいです」

む、少しカチンときただぞ今の言葉。

大体、なんで俺はこんな不法侵入少女の質問に律儀に答えちやつたりしてるんだよ。人と関わってこなかつたと言つても、コイツにだけは関わってはいけない、そんな気がする。

「じゃあ、お前が望んでいた答えつてのは、なんだよ？」

なので、せつせつと満足してもらご、せつせつと目的を達成してもらい、せつせつと関係を切つてしまおう作戦を実行します。

「まあ、正直に言えば先輩の答えなんてひとつでもいいのですが……」

俺の右手、震えるな。怒りを覚えたとしても相手は女、過ちを犯すな！

「まあいいでしょ、こつかは耳にする」とだと思いますし、私のことについて少々話せてもらいます」

「ずいぶんと自分勝手な話題の切り替え方だな……」

「夢と私、それは言わば、切っても切れない関係。赤ちゃんにベビーカー、小学生にランドセル、中学一年生に妙なテンション、そんなあたりまえの組み合わせのよつて、私と夢は一生のパートナーとなるよつな、そんな関係」

雨沢は一度空を見上げるようなそぶり（実際には美少女ポスターが貼つてある天井）を見せた後、唐突にピシッと、こちらに人差し指を向け、

「知つてます先輩？　人の夢つて見る」とが出来るんですよ？」

「え　、え？」

人の夢を見る？……どゆこと？

「ポカソと口を開けていたのが自分でも理解出来た。それくらい、コイツの言つてることに繋がりが見えない。」

「やうですね例えは、先輩が空を飛んでいる夢を見たとします。大空を、自分の両手だけを使って有意義に飛んでいる。それはもう最高の気分でしょうね。で、その夢を私は第三者田線で見ることが出来る。言わば、先輩が空を飛んでいるのを飛行機の中でゆつたりと眺めることが出来るといった、そんな感じです」

「でもですね」と雨沢は一度間を空け、

「「「」」が難しいところなんですが、夢つて必ずしも自分が主人公とは限らないじゃないですか？　もししくは、たとえ自分が主人公だったとしても、その自分を第三者田線で眺めるといった夢も存在する。そういった場合、私がその夢を見ようとしても、「第三者田線」という席はすでに取られているのですから、その夢を見ることが出来なくなるんです」

「ちよ、ちよと待てよ。人の夢を見る？　そんなことが本当に出来るのかよ？」

あまりにも現実ばなれしていて、理解が追いつかない。まず、なんでそんな話を俺にするのかという第一の疑問さえ解決していないのに、色々な情報を詰め込んでくるなつて話だ。お前は詰め放題の袋に限界以上の野菜を突っ込む主婦か！……すべてない、決してすべてないぞ！

「裏世界じゃ、今じゃ当たり前にようやく人の夢が売買されています。夢の中の出来事を分析すれば、その人がどんな生活を送ってきたのかなども分かつちゃいますしね。しかし、それは所詮人の夢を『見る』ことしか出来ない。そんな中で私は、ついに完成させたんです」「それって、つまり……」

クイズの出題者が答えを言ひ瞬間のよつた活き活きとした表情で、

「二次元から三次元への進出、私は今まで『見る』ことしか出来なかつた人の夢を、『体験』出来る機械を発明したんですね！」

「ババーン！なんて効果音が聞こえてきそうな自信のこもった笑顔で、俺の頬に餡を押し付けてくる。やめい、べトベトするわ。

しかし……体験？ バーチャル体験みたいなものだろうか？

～周囲の変化と俺の体調変化～ part4（前書き）

もう三連休も終わりか……なんだかいつの喪失感。早すぎる、平日と比べて終わるのが早すぎるっ！！

もうすぐテストなので、勉強頑張りたい！！

雨沢は物凄いドヤ顔をしながら、

「これって凄いことだと思いませんか？ 壊めてもいいんですよ先輩。いやむしろもう敬つちゃってください尊敬しちゃってください下僕になつてくださいよ」

「いや、そんな突拍子もないことをいきなり言われても、信用度に欠けるんだよお前の発言。人の夢を体験？ そりやあ凄いことだと俺も思うが、なんでそんな話を俺にするんだ？ その裏社会とやらの住人に売り込みに行けばいいだろ？ 一般人の俺にはまったく関係がない話だと思うぞ？」

あえて下僕発言には突っ込みず、正当な意見をぶつけてやつた。

というかそもそも、人の夢を見たり体験したり出来るという所も甚だ疑問だ。そんな話は聞いたことがないし、そもそもそんなものが開発されたんならきっと世界中が大騒ぎすると思つんだが。

「だから裏世界にしか広まつてないって言つたじやないですか。夢を見ることが出来るなんてこと、ほんとに一握りの闇組織しか知りませんよ。それに私が開発したこの『夢吸い取る君二号』だって、つい先日出来たばかりで、まだ誰にも知らせていませんですね」

裏世界、闇組織……、なんか「イツ」とこのまま親しい関係になつてしまつのは死亡フラグのような気がしてきた。クワバラ、クワバラ。

「あと一番の間違いは、先輩が無関係と言つといふですよ」

「んあ？ 僕？」

「そうです。浦隼人という人物は、私の計算上この計画に欠かせない人物なんですよ」

「……へえ」

「なんですか先輩その反応。こんな美少女発明家が、あなたが必要なんですと言つていて、先輩は、変態は変態でもそっち方面の変態さんでしたか、この口リ野郎」

「俺に勝手な設定を付け加えるな！ それと、お前は一応口リに分類されるといつことだけ教えといでやる」

「まあ言葉だけじゃ信憑性に欠けますし、論より証拠。実際に先輩に体験してもらいましょうかね？」

「コイツの会話の切り返し方は天然なんかじゃなく本心でやつてやがるな……。沸々と悪意の念が感じられる。

「といつても、サンブルが先輩の夢しかありませんし、とりあえず先輩には先ほどまで見ていた夢を、また体験してもらいましょうか

雨沢はそう言つと、近くにあったパソコンから、一本のUSBメモリみたいなものを抜き取り、先ほどまで俺が寝かされていたカプセルの一箇所に差し込んだ。

「この『夢吸い取る君』はですね、なんと、『夢体験君』とも兼用されているのです！　凄いでしょう？　この機械一つで夢を吸い取ることも出来れば、体験することも出来る。まさにファンタスティックです」

置いてきぼり感が物凄いので、ここでひとつ整理しておきたいと思つ。

「いっは今日入学してきたばかりの美少女高校一年生、雨沢夢美。

気がついたら俺の部屋に色々な機械類が置かれ、夢がなんだと叫んでいる。

で、俺はその最初の実験材料になろうとしている。

「ここまで情報ふまえ、コイツの今までの発言を考慮した上で
どうすればいいかを判断したところ……。

「逃げる…」

「もう遅いですよ~。」

しまったああああー!! 既に俺の体はほんの数十分前の状況と変
わらぬ姿をしていた。手を擧げることも許されないこの縛縛の状況!

「安心して下さい。安全は第一に保障します。ところで最後の質問
ですが、先輩は先ほど見た夢がどんなものだったか、記憶がありま
すか?」

「え、記憶? そんなのないけど……、つていうか待て、早まるな。
わざわざ俺をここから出すんだ」

「良かったー。『夢吸い取る君』で吸い取ることで、その本人には
夢の記憶がなくなる仕様になってるんです。あ、でもまだ先輩が夢
を見ていなかつたという可能性も無きにしろ在りすですが……、ま
あ先

輩なら大丈夫でしょう」

それでは！ と雨沢は満面の笑みを顔に浮かべると、

「文字通りの意味で、先輩を夢の世界へとお連れします。楽しんで
きてくださいねー」

「うわー、ま、待　っ…！」

カプセル式の扉が閉まり、再び光一つない暗黙の世界へと戻つて
きてしまった。

動けないことを確かめ、もう一度助けを求めるよつとした 、

その瞬間。

「ぐつ、お、おつ　つー、あ、あああ…… あああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああーー！」

頭に感じたもの凄い激痛。今まで体験したことのない種類の、想像を絶する痛みが沸き起こつた。例えるなら頭から四トントラックへ突っ込むような……いや、そんな痛みじゃない。締め付けられるような、いや、これも違う……あ、あああああああああああああああああああああああああああああああああああああ。

数秒だったのか数分だったのか、よく分からぬ。もしかしたら何日も経つたのかもしけないが、『氣づけば俺はコンクリートの上に倒れこんでいた。

体に浸透する、コンクリートの無機質な冷たさ。周りは若干の日の光は感じるものの薄暗く、夕方だといつことが分かつた。

「…………」

「…………西澤の言つ通り、夢の世界なのだからか…………？」

2章　～俺の夢に入る俺～ part1（前書き）

いや～正直今から結末はどうつかと考える日々です。
出来れば100話くらいいきたいのですが、
何か10話くらいで終わってしまう雰囲気……。

もひとつ文章力をつけないと。

2章　～俺の夢に入る俺？～ part1

「先輩、大丈夫ですか？」

「 つ！」

突然の雨沢の声に、過剰に反応してしまう俺の体。倒れていた体を無理やりに起こし、雨沢の声が聞こえた方向に向き直る。……が、そこには雨沢の姿は見当たらない。

「説明を怠っていました、すいません先輩。あ、私はその世界には存在していませんよ？ 仮に先輩が見た夢の中に私が登場していたら話は別ですが、現実に存在している、本物の雨沢夢美はそこにはいません」

雨沢の説明を聞いている間、周りの風景を改めて観察してみた。

どうやらここは、俺の通う高校のようだ。

窓から見える校庭と下校していく生徒、ふと後ろを振り向けば俺の在籍する2・3とプレートが貼つてある教室がある。

「もう一つ補足すると、私は今先輩の脳に直接言葉を送っていますが、これもあと十七秒後には出来なくなってしまいます」

なので私から最後に……ふー、と、一旦深呼吸をしたような音が聞こえたかと思つたあと、

「キーワード、『捲る』。制限時間、三十二分、ミッションスター

二二二

ブツツ、ツー、ツー……。

....え?

いくら叫んでも、聞こえるのは窓の外からの、下校中の生徒の笑い声だけ。俺の言葉を聞いてくれるものはいなさそうだった。

「待てよおい!! いつたいどういり」となんだよーーー！」

「へり言ふでも無駄だとこゝにとはなんとなく分かる。ただじつと何もせずこゝに」とが怖かつた。

あの雨沢夢美という女を甘く見すぎていたのかもしれない、何てことを今更ながらに思う。

ԵՐԵՎԱՆԻ

ガラガラガラ

窓の外を眺めていた俺は、真後ろから聞こえた教室の戸が開く音でさえ、過敏に反応してしまった。しかし、そこからさらに窓から身を投げたくなるほど驚いてしまったのは、そこに立っていた人物に原因がある。

「た、立花……さん？」

「浦君？ こんな時間にじうしたの？ もう下校時間すぎるよ？」

俺には異性の友達など存在しない。

故に女の子と喋った記憶など、母親のお腹の中にいた記憶と同等になるくらいないのだが、この田の前にいる彼女と喋った記憶だけは鮮明に覚えている。

いや、向こうはただ単に、クラスで浮いていた男子生徒を、馴染ませてあげようといった学級委員的な発想で話しかけてくれただけだと思うのだが、少なくともあの時の俺にとっては、その行為だけで十分だった。

わたくし、浦隼人は、目の前に立っている、立花楓さんに恋をしています。

「……た、立花さん」そ、な…なんで？」

「私？ 私はほら、学級委員になっちゃったから、その仕事がね」

俺としては、なんでこの世界にいるのですか？ てきな意味での「なんで？」だったのだが、立花さんは教室にいた理由を教えてくれたようだ。

立花さんは軽く親指を突き出した手で、後ろを指差し、「ちよつと教室で話さない？」「と、俺を誘つて……って、ええええええええええええ！」

「えっ！… お、俺と、お喋り……ですか？」

「うん、だつて浦君、去年からずっと休み時間は本ばつか読んでるし、学校が終わったらすぐ帰っちゃうし、話す機会が全然なかつたんだもん。あ、用があるんだつたら」

「い、いえ！… 喜んで…！」

「こ」が一瞬夢の世界だと「こ」を忘れるほど、俺は完全に興奮しきつっていた。ここまで自分の鼻息が聞こえてくるという体験は、生まれて初めてだ。

改めて考えると、これは俺が見た夢であるってことだよな？
…ナイス俺！！ 最高のタイミングで最高の夢を見てくれてありがとう。

「じゃあ入つて……つて、まるで私の家に浦君を招待しているみたいだね」

「そ……そですしね

「うつわなんかもうむりちゃ可愛いんですけど…」

これが本当にうつき俺が見た夢だとしたら、雨沢に吸い取つてもらつたのはラッキーだったのかもしれないな。こんな夢を見た後、現実に戻つたときの喪失感を想像すると……はあ。

教室に入つていく立花さんの背を眺めながら、俺も中に入ろうとした、

その時。

「…………」

針を刺されたような、ピリッとした痛みが手首に伝わった。

条件反射でふと痛みのした手首を見てみると、なぜか腕時計のようものが手首に巻きついている。

パネルには、『26・12』と表示されており、どうやら時を示すものではなく、何かのカウントダウンだといふことが分かった、着々とデジタルの数字は数を減らしている。現在『25・58』。

正直、こんなものに今は気を取られている場合ではない。なんたつて、あの憧れの立花さんと話せるという機会が目の前にまで迫っているのだ。こんなことは多分、現実ではもう経験出来ないだろう。

しかし……不思議なことに。今はこの腕時計のことが気になつてしまふがない。

俺はいつたい……どうしてしまつたんだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2307o/>

もしも人の夢を体験出来るとしたら……

2010年10月18日10時12分発行